



### <東海金>掛川掌瑛

張明澄先生は、実名を「張耀文」と称され、「明澄五術」という「五術門派」の十三代掌門(当主)でもあられました。「門派」というのは、日本で言う「流派」とは異なり、主に明の時代に、有力者の参謀として、また私兵部隊として、権力抗争の一翼を担ったものです。香港のカンフー映画で武装集団同士が戦争のように戦う場面を見ることがありますが、カンフーのような武術も五術の一環であり、当時の門派の姿の一端を垣間見せてくれます。



### 明澄五術の起源

明朝末期万暦帝の時代(日本の安土桃山時代ごろ)の中国福建省には、多くの五術門派がありました。なかでも、「梅花門派」と「白雲門派」は有力な門派でしたが、秘伝書の奪い合いから対立し、「梅花門派」側が、他の門派をだまして味方にし「白雲門派」を滅ぼしてしまいました。

滅ぼされた「白雲門派」の白夫人は、復讐を誓い、「梅花門派」の当主梅氏の幼い女兒たちのうち、妹の麗艶(れいえん)を連れ出すことに成功します。

最初は麗艶を殺すつもりだった白夫人ですが、どうしても殺すことができません。そこで麗艶を自分の娘として育て、「白雲門派」の家伝を教えて「梅花門派」に復讐させることを思いつきました。

もし「梅花門派」を倒せば、梅氏は自分の娘に殺されることになり、失敗しても、梅氏が自分の娘を殺すことになり、これこそ最高の復讐になると考えたのです。

白夫人は麗艶に白雪鶴(せっかく)という名をつけて育て、幼かった麗艶は梅家のことはすっかり忘れ、白家の人間として成長します。

雪鶴が16才のときに白夫人は亡くなりますが、「梅花門派」やそれに味方した門派を滅ぼすよう、雪鶴に遺言を残します。

復讐を誓った雪鶴は赤い衣を纏い、「白雲門派」を滅ぼした門派に対して離合集散を画策し、次々と門派の当主たちを殺します。

この噂は「梅花門派」に届き、梅家の長女梅素香(そこう)が立ち上がり、門派の連合軍を結成し、白雪鶴に挑みます。

素香は白い衣を纏い、実の姉妹が、それぞれ赤い衣と白い衣を着て、戦場で見えることになったのです。

雪鶴の勢力も「白雲門派」の残党なども集めて拡大していましたが、門派連合軍の前には敗退し、ほとんど全滅してしまいます。

一人で囲みを逃れた雪鶴は「梅花門派」の本拠地に向かい、掌門の梅耕天、つまり自分の父親を、そうと知らずに殺してしまいます。

さらに、姉素香の婚約者に目をつけ、誘惑して自分のものにしてしまいました。

そのころ、ようやく素香は雪鶴が自分の妹麗艷であることに気づき、二人に文を送ります。このころから、素香の体は病に侵され病床に伏せるようになります。

手紙を受け取った雪鶴は驚きますが、今更どうにもできません。奪った婚約者とともに素香の病床にひざまずき、許しを乞うのが精一杯です。

素香の病気は、今で言う白血病であり、もう余命いくばくもないこと知っていた素香は二人を許し、汚れてしまった「梅花門派」を閉じ、新たな五術門派を作り「明澄派」と名付けたいと申し出ます。「明澄派」とは「明るく澄んで透き通り、塵も汚れも全く含まない清らかな門派」という意味です。

梅素香は「明澄五術」初代の掌門となり、やがて生まれる雪鶴夫婦の子供を二代目として五術の家伝全てをその子に授けることにし、自分は山奥の石塚に籠もり、次のような十五種類の『大法』と名付けた家伝書を書き残します。

『紫薇大法』 『子平大法』 『星宗大法』  
『六壬大法』 『奇門大法』 『太乙大法』  
『面掌大法』 『陽宅大法』 『風水大法』  
『方劑大法』 『鍼灸大法』 『靈治大法』  
『玄典大法』 『養生大法』 『修密大法』

『大法』を書き上げた後、梅素香は自ら石塚を爆破し、永遠の眠りにつきます。『子平大法』には素香自身の詩が書かれていました。

芳身蔵石塚 芳身石塚に蔵し、  
墨跡留余哀 墨跡余哀を留む  
天上魂歸去 天上魂は帰り去き  
人間不再来 人間再び来たらざり

麗艷夫婦はその後女の子を産み、梅素香の遺言どおり明澄五術二代目掌門を継承させます。その後、「明澄五術」は福建省の名門五術門派として活躍しますが、清朝時代後期に台湾へと移転します。清朝は満州人の政権であり、漢民族にとっては異民族支配ですから、伝統的な門派が活動するには、不自由なことが多かったのです。

当時の台湾も清朝の統治下にありましたが、その前の鄭成功やオランダの植民地時代に比べずっと緩い統治になっていました。そのために福建省から台湾に移住する人々が多く、福建語がそのまま台湾語となり、習慣も福建省と変わりません。台湾には多くの五術門派が残っていますが、そのほとんどは、かつて福建省から移転したものです。

張耀文先生の曾祖父である王文澤は、「明澄五術」の十代掌門でしたが、十一代が早世、十二代が空位になっており、1934年に張先生が生まれたときに命式を見て、十三代掌門に指名し、戸籍名の「明澄」と実名の「耀文」という名を与えました。張先生は王文澤の曾孫に当たるため、代を数えると十三代ということになります。

王文澤は、漢方医として著名な人でしたが、五術家としても天才的な人で、多くの著作を残しています。代々の掌門は、門派の秘伝を保存するだけでなく、実践によって得た結果に基づき、秘伝の内容を書き換えて行かなければなりません。特に初代の残した『大法』はすべて「歌訣」で書かれたもので、予備知識抜きには解りにくく、その後代々の掌門が『大法心得』というものを書いて補完してきました。また『ト易大法』などのように梅素香が残した十五の『大法』に含まれないものもあります。十五の『大法』をよく見ますと、

|   |                    |
|---|--------------------|
| 命 | 『紫薇大法』『子平大法』『星宗大法』 |
| 卜 | 『六壬大法』『奇門大法』『太乙大法』 |
| 相 | 『面掌大法』『陽宅大法』『風水大法』 |
| 山 | 『玄典大法』『養生大法』『修密大法』 |
| 医 | 『方劑大法』『鍼灸大法』『靈治大法』 |

という順序になっておりますが、実際には「太乙命理」「子平方劑」「六壬風水」「河洛命理」などのように、どの体系にも「五術」が揃っており、十五の『大法』だけですべてを網羅したものではありません。

また、梅素香は『子平洩天機』や『薰徳賦』など、「芸海」と呼ばれる「禪」思想の色濃い五術書も残していません。

透派のテキストには、「大法」「心得」の他「止観」「参禅」「修密」などというものがあります。このうち『止観』はいろいろの象意が羅列されたもので、これがあれば本のような分厚い鑑定書(台湾では必須アイテム)を作ることができます。『参禅』は「悟り」の意味で、かなりレベルの高い家伝という意味になります。「修密」とは、本来「密教」を習得することであり、『参禅』の上を行く、今まで他の流派のどこにもない門外不出の最高家伝に付けられる名称です。

『心得』は『大法』を非常に解りやすくまとめたものなので、ほとんどの科目について書かれましたが、『止観』は鑑定書を書くのが目的ですから、その必要のある科目についてしか書かれませんでした。『参禅』については「明澄五術」独自の理論があるものに限られ、さらに『修密』となると、他門派とは決定的にレベルの違う本当の最高家伝を持つ科目だけについて書かれたものです。因みに「子平」には『修密』のテキストがあり、別名を『無学訣』ともいいます。「無学」とは仏教用語で、すべてを学びつくしてこれ以上学ぶ必要のない最高の境地を意味します。

現在残っている『心得』『止観』『参禅』『修密』はすべて王文澤の手によるものか手の入ったものです。王文澤は、これら代々の掌門が手がけた家伝書の他に、『子平授生訣』『子平正宗』『子平弁方』『紫薇探奥』『巒頭理気解』等々といったタイトルで膨大な著作を残しております。

十三代掌門の張耀文先生による『心得』等の書き換えは行われませんでした。講義のなかでは張先生の実践によって得られた新しい理論も展開されました。

『明澄五術・子平命理・基礎篇／象意篇』(張耀文口述・掛川掌瑛編著・明澄五術全集第一卷／第二卷)

『明澄五術・子平姓名全書』(同第三卷)などの書籍は、現代にマッチした新しい『心得』というべきポジションにあたるものと言えます。今後はこのような書籍をできるだけ多く出版し、「明澄五術」を公開するとともに、「五術」世界における「明澄五術」と張耀文先生の真価を世に知らしめて参る所存です。